

平成22年度 大学生の就業力育成支援事業「自分の言葉で表現できる」学生の育成
評価結果

数値評価平均点

	外部評価	内部評価	アドバイザー評価
1 事業内容15項目	4.2	4.3	4.0
2 就業力3項目	4.0	3.3	4.0
3 総合評価	4.0	4.5	3.5
全項目	4.1	4.2	3.9

1 事業内容(事業の実施状況)

各取組を着実に実施するために、取組毎に担当責任者(教職員)を配置しています。担当分担任については、各項目の末尾に以下の記号で明記しています。

(P)就業力育成プロジェクト室(大久保委員長)

(T)ワーキンググループ「オムニバス講義『地域創生Ⅰ/Ⅱ』の再編」(アリスジュ・ジェフリー委員)

(F)ワーキンググループ「フィールドワークの改革」(探究型:武田篤志委員, 協同型:迫田耕一委員, 実務型:迫田耕一委員)

(S)ワーキンググループ「演習の改革」(菊地裕幸委員)

	外部評価	内部評価	アドバイザー評価	平均点
(1) 実施体制基盤の構築 就業力育成プロジェクト室(準備室)の開設により、平成23年度からの本格実施にむけ、実施体制の基盤を構築する。(P)	5(達成している) 平成23年度からの本格実施に向けしっかりと実施体制を構築している点を高く評価する。	5(達成している) 本就業力育成支援事業を推進するため、他大学を訪問調査し、本学独自の実施体制基盤を短期間のうちに構築しており、高く評価できる。	5(達成している) 専任職員2名、調査研究員2名を配置するなど、他校では兼務が多い中、充実した陣容であると思います。体制は整っていると評価します。	5.0
(2) 実施責任体制の明確化 各取組の担当責任者の選定と委嘱を行い、各取組の実施責任体制を明確にする。(P)	5(達成している) 実施責任体制が明確である点を高く評価する。	5(達成している) 本就業力育成支援事業を推進するため、担当部署を明確化し、それぞれに適任者を配置しており、高く評価できる。	5(達成している) 各取組みに対する責任体制も明確であると思います。	5.0
(3) Webキャリア・ポートフォリオシステムの構築 学部・学科教育を通して、どのような経験や能力が形成されているかを学生自身が確認できるようにするために、Webキャリア・ポートフォリオのシステム構築を実施する。具体的には、学生の自己評価のための評価項目の策定(コンピテンシーの設定)のための調査研究を実施した上で、評価項目を確定する作業等に取り組む。また、同システムの詳細な運営方法を検討し、明確化する。(P)	3(どちらともいえない) 多くの学生がデータ入力や「振り返り」作業を行えるかどうかという点で改善の余地がある。	4(ある程度達成している) Webキャリア・ポートフォリオのシステムが有効に機能するために、他大学のシステムを調査・研究し、評価項目(コンピテンシー)の設定に独自の工夫を行ったことは評価できる。ただし、時間的制約もあり、全教職員に対する説明が年度末になっており、十分なサポートがなされることが望まれる。また、今後、システムの改善が必要となった場合は、適切な対応が望まれる。	4(ある程度達成している) かなり充実した内容のポートフォリオシステムが構築されていると思います。このようなシステムは構築よりも運用が大事であると思いますので、いかに学生に書かせるかだと思います。金沢工大から学んだ取り組みにさらに貴学独自の工夫を行って充実した運用になることが期待されていると思います。	3.7
(4) スタッフ募集・採用 本取組を着実かつ効果的に推進するために、就業力育成プロジェクト室のスタッフとして調査研究員および業務補佐員の募集と採用を行う。(P)	5(達成している) (無記入)	4(ある程度達成している) 就業力育成プロジェクト室を設けて、室長の他に2名の研究員を配置しており、評価できる。また、研究員が、フィールドワークの場として慈眼寺商店街等に働きかけるなど、一定の成果を得ていることも評価できる。しかし、業務補佐員の配置を含め、今後のさらなる活動が期待される。	4(ある程度達成している) (要員計画は達成していると思います)採用にあたってどのような点を重視したのか、どのような選考を行ったのかがわかればよかったです。現状では人を採用しただけの記述に見えました。	4.3
(5) オムニバス講義の改善 オムニバス講義「地域創生Ⅰ/Ⅱ」について、科目担当者が外部講師を紹介し、外部講師に対する質問は学生が紙に書いて科目担当者が読み上げるという従来の受け身型の授業から、外部講師の事前調査・紹介、授業進行、講師との質疑応答・討論、さらに講師に対する礼状を書くところまでを受講生が行うという参加型の授業に内容を変更するために、詳細な指導内容を整備・確定する。(T)	5(達成している) 若い世代から講師を招聘しているところを高く評価する。	4(ある程度達成している) オムニバス講義「地域創生Ⅰ/Ⅱ」を学生参加型に改善し、実業界や社会との接点を重視する方針を示したことは評価できる。また、その準備を整えていることも評価できる。今後に期待したい。	3(どちらともいえない) 計画はできた段階だと思います。具体的にどのようなテーマが連続的に展開されるのか、どのように知恵が体系化されていくのかが、わかりませんでした。また、自分の言葉で表現できるようにするための仕掛けや仕組みが見えませんでした。	4.0
(6) 社会調査実習の全学化 これまで福祉社会学部の2学科の学生のみを対象に実施されてきた「社会調査実習」について、様々な学部・学科の学生が多様な視点、例えば経営学や社会学の視点などから企業や地域等に関する調査活動に取り組めるように、新たに平成23年度から全学化すると同時に、テーマ・内容開発を行い、さらに必要な活動受入先の開拓・選定を行う。(F)	4(ある程度達成している) 企業や地域等に関する調査活動に取り組める工夫がなされている点は評価できるが、実施面がまだ不十分である。	4(ある程度達成している) これまで特定学科で行われていた「社会調査実習」の枠組みを超えて、全学的な取り組みとする方針が示されたことは評価できる。このことにより、学生の職業観・勤労観の育成につながることを期待される。個々の学科で実施に移すなかで、さらに改善を図っていくことが望まれる。	4(ある程度達成している) 福祉社会学部での授業から全学的に展開していくとする動きは評価できます。全学となるとかなり大がかりな調査になるため、企業への負担が増したり、これまでではありえない事態が発生するなど、様々な障害が発生すると思われます。また、具体的な内容には至っていないようですので、周到な準備が期待されます。	4.0
(7) 海外ビジネス実習の開発 平成23年度から新設する科目「海外ビジネス研修」について、実学的な専門教育という観点から内容開発を行う。(F)	3(どちらともいえない) 実施面で改善の余地がある。	4(ある程度達成している) グローバル化が急速に進展するなかで、国境を越えたビジネスが拡大しており、海外企業での体験を通じて、世界に通用するビジネス感覚を習得することはきわめて重要であり、評価できる。英語でのプレゼンテーションを事前授業に取り入れるなど、工夫していることも評価できる。今後の展開が期待される。	4(ある程度達成している) 今後、具体的な開発が期待されます。内向きになっている日本の学生といわれますが、本取り組みのように学校側が背中を後押しする取り組みが必要かと思われます。気をつけなければならないのは、「海外旅行」にならないようにすることだと思います。ストレスフルな環境においてみたり、海外の学生に圧倒され続ける環境においてみたりするなど、刺激的な内容が期待されると思います。	3.7
(8) 演習の再構築 学生が大学での学習体験をさらに深化・集大成させ、成果として何かを「つくりあげる」機会を得られるように、平成23年度から全学で演習を「履修指定化」し、演習において「卒業研究の必須化」を行うための体制を整備する。また、フィールドワーク的要素を取り入れるなど、実学的な専門教育という観点から演習の内容を各学科で検討し、就業力育成プロジェクト室を中心に再構築する。(S)	4(ある程度達成している) フィールドワークを取り入れた点を評価できる。	4(ある程度達成している) 「卒業研究」を全学的に必須化し、学生の問題発見ならびに問題解決の能力を向上させ、「自分の言葉で表現できる」能力を涵養することは就業力の育成につながるものであり、高く評価できる。卒業研究は、フィールドワーク的要素を重視しつつも、多様な形態が可能であり、今後の取り組みと成果が期待される。	3(どちらともいえない) 卒業研究、卒業論文は4年間の勉学の集大成として必須であるという考えを持っており、他校でも卒研・卒論が必修でないため、4年生の後期はアルバイトと旅行にあけくれるという事態が発生し、大学4年間が何だったのかという意味の希薄化が起きているように思えます。ゼミ、卒研・卒論を仕上げるために教養科目、専門科目であり、ゼミによって、考える力、表現する力、読む力が培われていくものだと思います。自分の言葉で表現できる学生の育成には必須の取り組みだと思います。	3.7
(9) 東京女学館大学取組の応用 本取組の内容にも関連がある、東京女学館大学の学生支援GP「卒業成長値を高める『10の底力』」の取組内容を調査し、本取組の改善に反映させる。(P)	3(どちらともいえない) 調査結果の応用面で改善の余地がある	4(ある程度達成している) 当該大学の取り組み(「10の底力」等)を調査して、本学独自のWebキャリア・ポートフォリオの構築に努めており、評価できる。特に、コンピテンシーの設定等に関して役立っているものと評価できる。しかし、今後、実施の過程で検証されることが望ましい。	3(どちらともいえない) 貴学内においてカリキュラムマトリクスを作成するまでには至っていたため、上記のような評価となりました。	3.3
(10) 同志社大学取組の応用 本取組の内容にも関連がある、同志社大学の「公募制のプロジェクト科目による地域活性化～往還型地域連携活動のモデルづくりを目指して～」や「プロジェクト・リテラシーと新しい教養教育～課題探求能力を育成するPBL教育の方法論的整備～」といった取組を、なかでもPBL推進支援センターの取組内容を調査し、本取組の改善に反映させる。(F, S)	3(どちらともいえない) 調査結果の応用面で改善の余地がある	4(ある程度達成している) 本学の就業力育成事業で重視しているフィールドワークとの関連等から、当該大学の公募型プロジェクト科目の取り組みを調査・研究しており、評価できる。ただし、本学で実施する場合には、本学に適した形式を検討する必要があると思われる。	3(どちらともいえない) 視察し報告がなされた段階だと思います。今後の展開が期待されます。	3.3
(11) シンポジウムの実施 学内者(本学教職員)だけでなく、学外者(県内の企業や高校の関係者など)も参加可能なシンポジウム(『自分の言葉で表現できる』学生の育成のための効果性の高いプログラムの構築(仮題))を開催し、本取組の理念に関する共通理解を深める。(P)	4(ある程度達成している) 参加者の内訳と日程面が不十分である。	5(達成している) 本学の就業力育成プロジェクト事業の初年度の取り組みの一環として、全学の共通理解を図るため、教員・学生・実業界の代表による発表と意見交換を行ったことは、高く評価できる。160名の参加があったが、参加しなかった教員もかなりあり、さらなる取り組みが望まれる。	5(達成している) 渡辺三枝子立教大学教授を招いての基調講演、就業力育成事業報告、パネルディスカッションなど充実した内容のシンポジウムが実施されている。	4.7

	外部評価	内部評価	アドバイザー評価	平均点
(12) 全国合同フォーラムへの参加 全国合同フォーラムに参加し、他地域・大学の大学生の就業力育成支援事業に関する情報を収集し、研鑽を深める。(P)	5(達成している) (無記入)	4(ある程度達成している) 全国合同フォーラムに参加して、他大学の就業力育成支援事業の取り組みに関する情報集を行い、調査したことは評価できる。本学の意見も広く取り入れ、本学の当該事業が成功することを期待したい。	5(達成している) フォーラムへ参加しレポートがなされている。	4.7
(13) Webサイトからの情報発信 2月までにWebサイトを作成し、平成22年度の取組を中心として、各取組の内容や実施状況などをタイムリーに地域社会に向けて情報を発信する(P)	4(ある程度達成している) 情報発信のより一層の充実が期待される。	4(ある程度達成している) Webサイトを作成して情報発信しているほか、地元新聞等にも採り上げられ、一定の評価ができる。しかし、いっそうの工夫が期待される。	3(どちらともいえない) Webサイトを構築している様子はうかがえた。	3.7
(14) 内部評価・外部評価の実施 委嘱した内部・外部評価委員に、本取組全体と本年度の実績などに関する評価を実施してもらい、その結果を次年度以降の計画に反映させる。(P)	5(達成している) (無記入)	5(達成している) 外部評価機関と内部評価機関を設けて評価体制を整えており、適切であると評価できる。評価結果は、次年度以降の計画に反映されるものと期待できる。	5(達成している) 評価委員が設定され、評価が実施されている。	5.0
(15) 活動報告書の作成・公表 活動報告書を作成する過程で平成22年度取組の成果や課題を最終確認し、浮き彫りとなった課題については次年度以降の計画の改善に繋げる。また、同報告書の公表によって、本年度の取組の成果などを地域社会に向けて情報発信する。(P)	5(達成している) 取組について十分な報告がなされている点を高く評価する。	5(達成している) 平成22年度取組の成果や課題を明記し、次年度以降の計画・展望を示しており、適切であると判断できる。今後、本報告書が全教職員に周知され、地域社会に向けて情報発信されることが期待される。概要版の作成・配布も望まれる。	4(ある程度達成している) 年次報告書が作成され、次年度へ向けた材料とはなっているように思われる。	4.7

2 学生就業力評価項目(学生の自己評価及び企業アンケートの定量的評価, 定性的評価)

	外部評価	内部評価	アドバイザー評価	平均点
(1) 聴く力(傾聴力)	4(ある程度達成している) (無記入)	4(ある程度達成している) 本事業の推進に際して、本学学生の特徴の解明のため、学内と学外において、アンケート等の調査を実施し、分析したことは評価できる。企業を対象としたアンケートで、本学学生の聴く力(「丁寧に聴く」)は、5段階評価で平均3.71であり、ある程度良好であることを確認している。本事業により、4以上になることを目指すとしている。ただし、学生の自己評価調査では、もっと広範な調査が望ましい。	4(ある程度達成している) 学生の自己評価が見当たらなかった。聴く力はまずまずといった状況であると思います。すなおさ、丁寧さがある卒業生が多いものと思います。	4.0
(2) 話す力(発信力/表現力)	4(ある程度達成している) (無記入)	3(どちらともいえない) 企業アンケートで、本学学生の話す力(「自分の言葉で適切に表現できる」)は、5段階評価で平均3.27であることを確認している。本事業により、4以上になることを目指すとしている。	4(ある程度達成している) 学生の自己評価が見当たらなかった。話す力は低めであると思います。改善が求められると思います。	3.7
(3) 考える力(理解力)	4(ある程度達成している) (無記入)	3(どちらともいえない) 企業アンケートで、本学学生の考える力(「複数の視点から考えることができる」)は、5段階評価で平均3.10であり、やや低いことを確認しており、本事業により、4以上になることを目指すとしている。	4(ある程度達成している) 学生の自己評価が見当たらなかった。考える力は低いようです。改善が求められると思います。まずは言葉がしっかりと理解されているか、単語の定義をしっかりと持っているかからスタートすればよいのではないかと思います。言葉できちんと理解できれば、論理的思考力はおのずと養われると思います。その意味でも卒研・卒論は必須化するのがよいと思います。	3.7

3 総合評価(プロジェクト全体の総合評価)

	外部評価	内部評価	アドバイザー評価	平均点
(1) 大学時代に取り組んだことを、自信を持って、「自分の言葉で表現できる」学生を育成	4(ある程度達成している) 今後の取り組みの本格実施に期待できるプログラムである。	4(ある程度達成している) 本事業の推進により、フィールドワーク、「社会調査実習」、「海外ビジネス実習」等の全学化が推進され、多くの学生が広く多様な経験ができるようになった。また、すべての学生が「卒業研究」等を通じて、「自分の言葉で表現できる」力を習得して、自信を持って発言できる環境が整えられる方針が決められた。これらのことが評価できる。	3(どちらともいえない) まだ取り組みが始まったばかりであり、今後の展開が期待されます。	3.7
(2) 教育改革を行い、効果性の高い育成プログラムを社会や他大学へ提案	4(ある程度達成している) 社会や他大学への積極的な情報発信が望まれる。	4(ある程度達成している) 平成23年度より、進級制の実施、「卒業研究」の必須化、フィールドワークの重視等を決め、学生に対して効果性の高いプログラムを推進するように改革を行っており、評価できる。本学の教育の教育プログラムや改革の概要はホームページ、『大学案内』、自己点検報告書等を通じて社会や他大学に情報発信している。	3(どちらともいえない) 上記同様、まだ取り組みは始まったばかりであり、今後の展開が期待されます。	3.7
(3) 学生の卒業後の社会的・職業的自立に向けた新たな取組み(産業界との連携による実学的専門教育を含む)	4(ある程度達成している) 産業界とのより密接な連携が望まれる。	5(達成している) 卒業後の社会的・職業的自立に向けた事業計画を立案し、そのために産業界との連携を図り、「地域創生I/II」、「海外ビジネス実習」等の実学的専門教育を重視した教育プログラムを取り入れている。	4(ある程度達成している) 産業界との連携、実学的な教育への展開は期待できます。卒業後の社会的・職業的自立も視野に入れた育成が期待されます。	4.3
(4) 文部科学省に提出する補足書	4(ある程度達成している) 達成目標の改善については次年度以降でない評価できないが、採択時の指摘事項については的確に対処し、より充実した形でプログラムに反映している点が評価できる。	5(達成している) 必要な補足を、今後とも実施項目の検討・補足を行うこととしている。	4(ある程度達成している) おおむね記述されていると思います。	4.3